



中国・四国圏の持続可能な地域づくりシンポジウム  
 —創造的人材と地域住民、行政の3者が連携した新しい取り組み—

# 関係人口による 地域づくり

田口 太郎 / 徳島大学総合科学部  
 taguchi@tokushima-u.ac.jp  
<http://www.taguchi-studio.net>  
 taro\_taguchi

1

## 関係人口による地域づくり

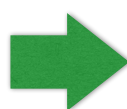
### 自治のカタチのリ・デザイン

#### 地域づくりとは、地域の「自治力」を高める取り組み

- ◎ かつては集落自治により、地域社会は自律的に運営されてきた
- ◎ 戦後の民主化／政府の拡大、によって役割が変わった
- ◎ 人口が減少し、行財政が悪化し、価値観が多様化する中で、地域それぞれが再び「自治力」を取り戻す必要がある

#### 自治力は何によって規定されるか

- ◎ 企画力
  - 地域の状況に応じて必要な手立てを企画立案する
- ◎ 実行力
  - 立案した手立てを実行する



しかし、この双方とも  
 衰退させている  
 少子高齢化・人口減少



地域の外から  
 協力者を得る必要

## 住民主体と市民主体

### 居住を前提とする「住民」／地域に関わる「市民」

- ◎ 道路交通網の発達した現代において「住民」と「市民」はことなる
  - 週末だけ行き来する子供世代
  - 通い農業者
- ◎ 地域を担うのは「住民だけ」なのか？

### 多様な担い手を前提としてまちづくりを考える

- ◎ 地域内外の様々な主体の連携をどのように育むのか？
- ◎ 機能する連携相手をどのように見つけるのか？
- ◎ 様々な連携の中で地域が戦略を持つ必要がある

### Institutional Process Designという考え方

- ◎ まちづくりにおける連携のプロセスデザイン：田口のテーマ

## ライフスタイルの変化

### ライフステージの中で「移動」する社会

- ◎ かつての定住を前提とした社会計画からの脱却の必要
  - 子供時代：親元で生活
  - 進学によって都市部へ：地方から都市へ
  - 就職し、世帯分離：実家に戻らずに独り立ち
  - 自由恋愛による結婚：結婚を期に広域的に移動
- ◎ 世帯構成員の減少による多様な世帯モデル
  - 単独世帯（移動自由度が高い）の増加

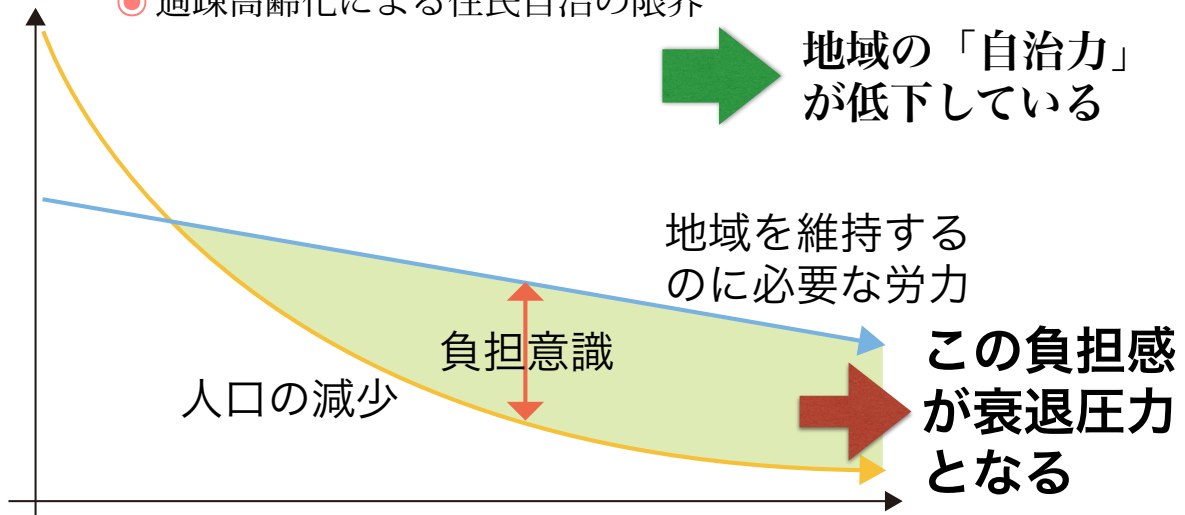
### 「定住」を前提に担い手を考える事が難しい

- ◎ 「移住・定住」から「移住／定住」へ
- ◎ 「定住」が一般的居住形態から、ライフスタイルの一つへ

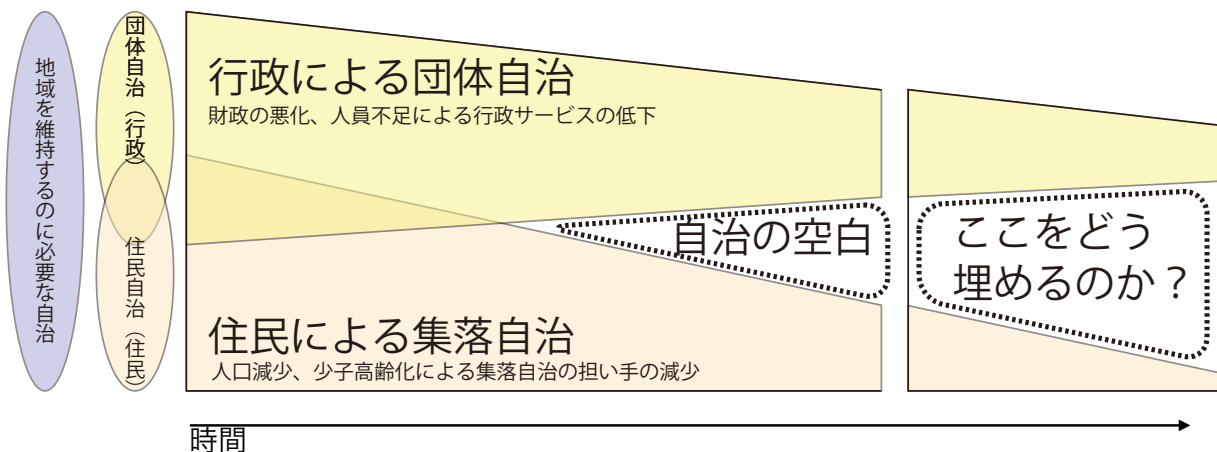
## 「地域の衰退」とはなにか？

### 地域に必要な力と担い手数とのギャップ

- 財政健全化に向けた行政職員の減少、行政サービスの減少
- 過疎高齢化による住民自治の限界



## 自治の衰退と“自治の空白”



### 行政と住民の衰退から生まれる“自治の空白”

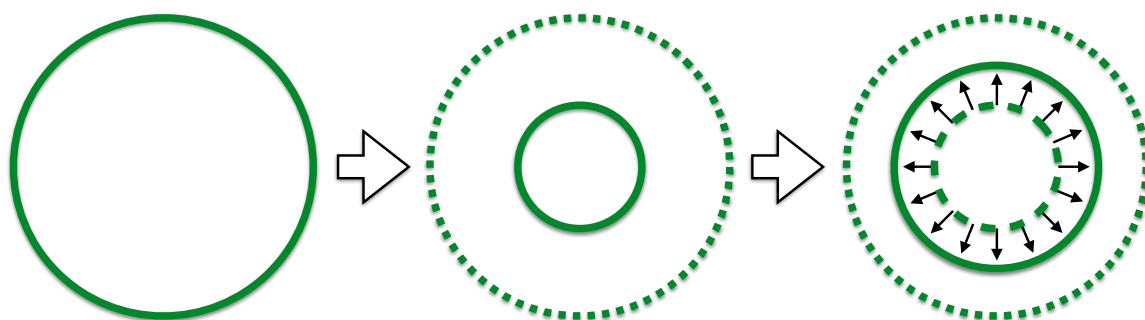
- 自治の空白をどう埋めるか？
- 地域を維持する「必要量」と「実際量」のギャップを埋める

# 地域づくり を進める新たな主体 Ⅱ 「関係人口」

7

関係人口による地域づくり

「自治の担い手」の獲得を目指す必要

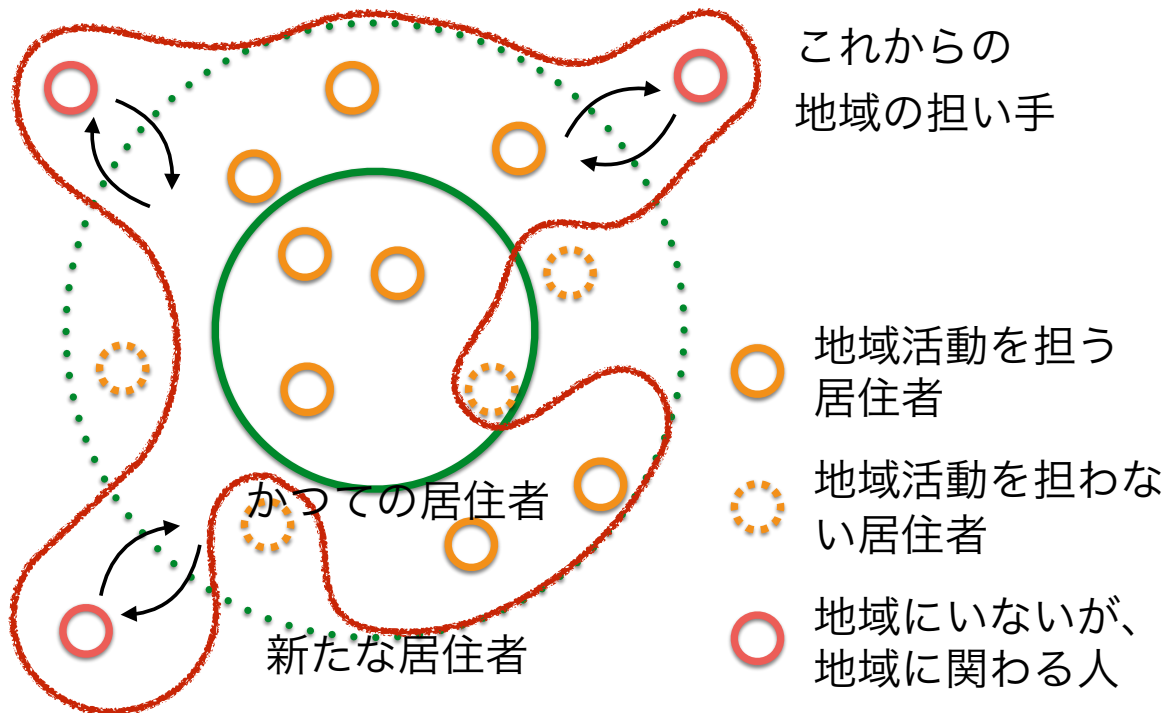


かつての  
人口=自治力

過疎化による  
人口減=自治力減

「移住」による  
担い手の獲得  
=自治力の再生

## 新しい担い手はどこにいるのか？



徳島大学 田口太郎 / taguchi@tokushima-u.ac.jp

9

## 「関係人口」をどう捉えるか？

### 地域づくりとは、地域の「自治力」を高める取り組み

- かつては集落自治により、地域社会は自律的に運営されてきた
- 戦後の民主化／政府の拡大、によって役割が変わった
- 人口が減少し、行財政が悪化し、価値観が多様化する中で、地域それぞれが再び「自治力」を取り戻す必要がある

### 自治力は何によって規定されるか

- 企画力
  - 地域の状況に応じて必要な手立てを企画立案する
- 実行力
  - 立案した手立てを実行する



しかし、この双方とも  
衰退させている  
少子高齢化・人口減少



地域の外から  
協力者を得る必要

徳島大学 田口太郎 / taguchi@tokushima-u.ac.jp

10

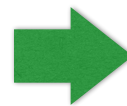
## 出口としての関係人口

### 新たに入ってくる人との信頼関係づくりは難しい

- 地域住民は生活を通じて、信頼関係を構築する
- 「関わり方」のイメージも活動を通じて認識されるため、入り口からの信頼関係は若者同士などの“気の合う”属性同士でないと難しい

### 出口としての関係人口

- 一定期間の関係を経て、距離が空いてしまう際に「関係人口」に“とどまる”ことで関係性や役割が継続する
- “良い関係”が築けた地域との「関係人口」化が進み、“関係悪化”した地域とは「関係人口」化しない

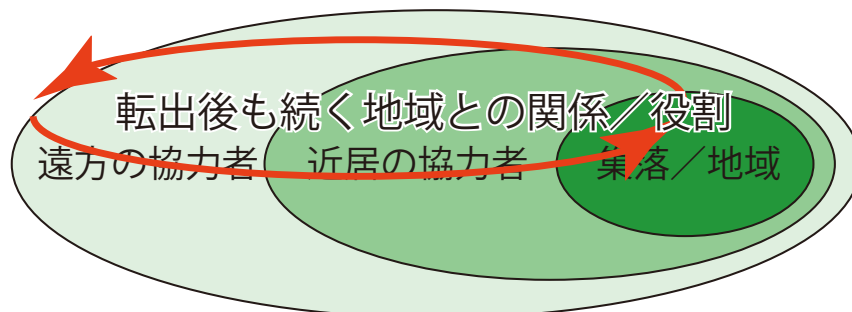


“モテ地域”  
であるか／否か

## 出口としての関係人口

### 地域の「関係性」の中にとどまる転出者や地域おこし協力隊

- 転出者が地域との関係を継続する地域は外部支援の輪が大きく広がる
- 転出者をはじめ、関係性が遠のく人材との関係が悪化する地域は外部支援の期待が少ない



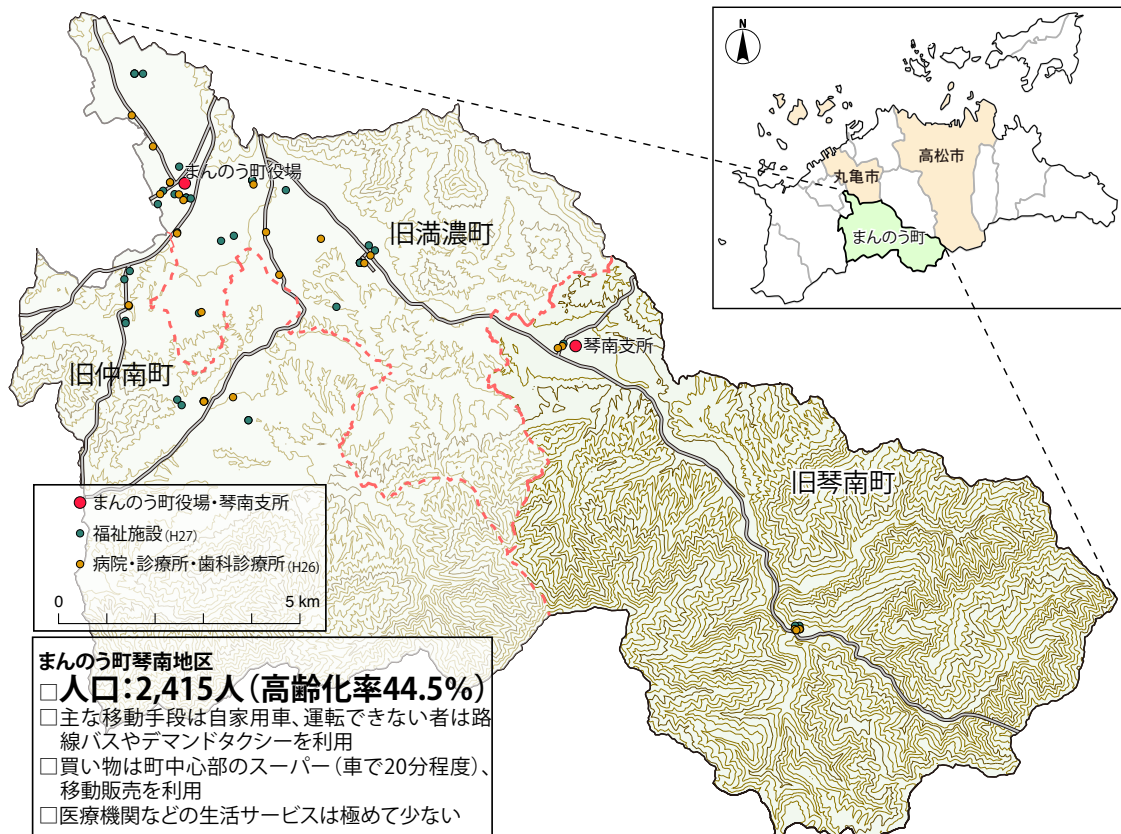


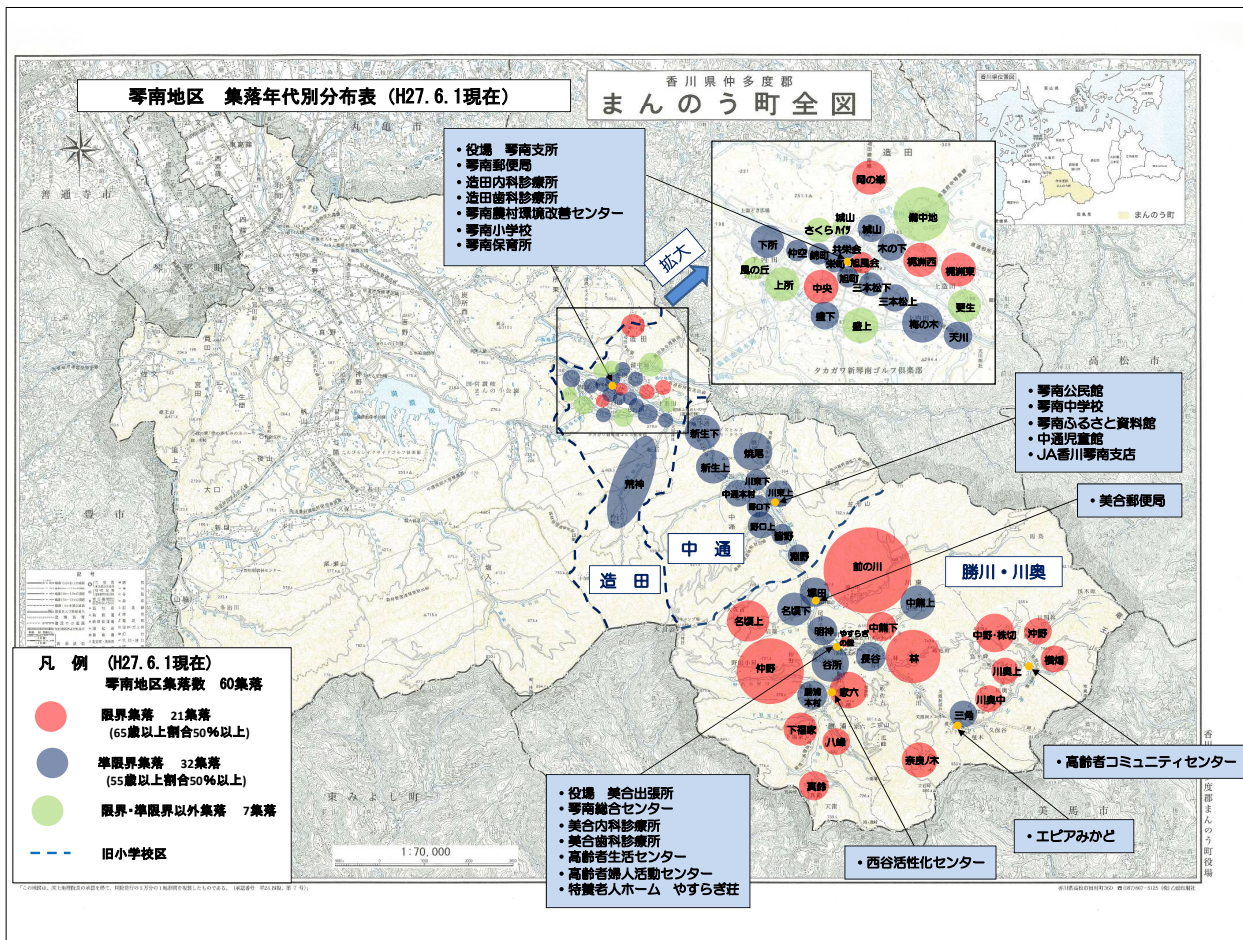
香川県まんのう町旧琴南町  
諦め感への挑戦プロジェクト

超過疎化集落  
における  
集落維持と  
ネットワーク型自治  
へのチャンレンジ

香川県まんのう町琴南地区  
における集落維持の検討

香川県まんのう町琴南





15

## 転出子懇談会

### 転出子によるサポートの連携可能性の模索

- 転出子同士の連絡関係はどうなっているのか？
- 転出子同士でサポートの融通をつけることは可能か？
- そもそも、サポートに対してどのような認識でいるのか？



16



# 県内各地から集まり、 地域の支え方を検討する転出子

毎月開催している  
「転出子懇談会」  
出席メンバーの居住地



17

## 転出子懇談会

### 転出子による生活サポートの多様性

- 転出子によるサポートは週3回の買い物サポート～年1回の草刈りまで多様性がある
- サポートをしていなくても毎週末戻ってきている転出子もいる

### 転出子ネットワークは祭り参加を介してつながっている

- 転出子のネットワークは20代～60代まで広がっている
- 祭りの準備などで定期的に顔を合わせる機会があり、お互いの認識はしている
- すでに個別にサポートを融通しあっているケースもあった

### サポートの限界については漠然と感じていおり、融通の可能性もある

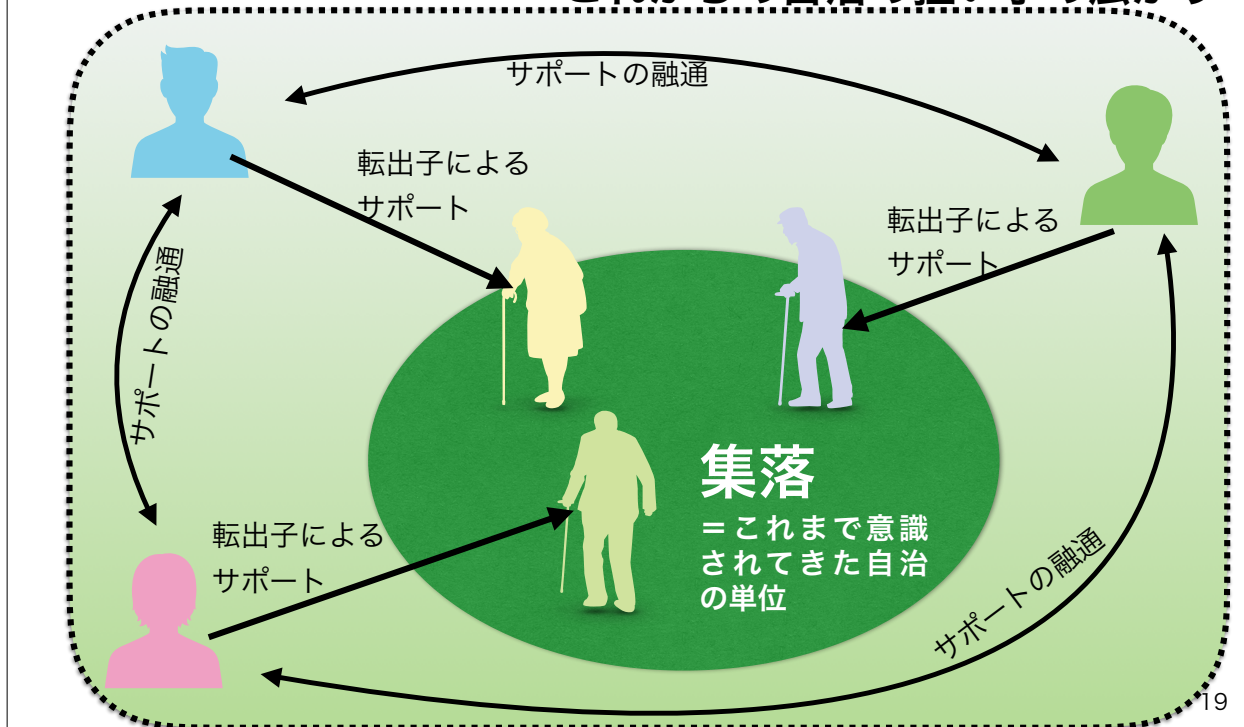
- 当初は否定的だったサポートの融通については前向きに変わりつつある
- 今後も定期的な懇談会を通じて実践につなげていく

18

18

# ネットワーク型自治の可能性

## これからの自治の担い手の広がり



19

## ネットワーク型自治の構築に向けて

### 転出子懇談会を通じた転出子の状況の把握

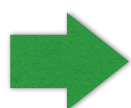
- 実際に誰が行き来しているのか？
- 転出子以外の“ファン”はいるのか？

### サポート内容の把握

- 実際にどのようなことをやっているのか？
- サポートへの評価と継続可能性？
- 諦めているサポート

### 外部支援者ネットワークの構築可能性

- 実際に転出子同士のネットワークづくりは可能か？
- 転出子同士の融通の調整をどうするか？
- サポートを受ける側の“プライド”“申し訳ない感”をどう軽減させるか？



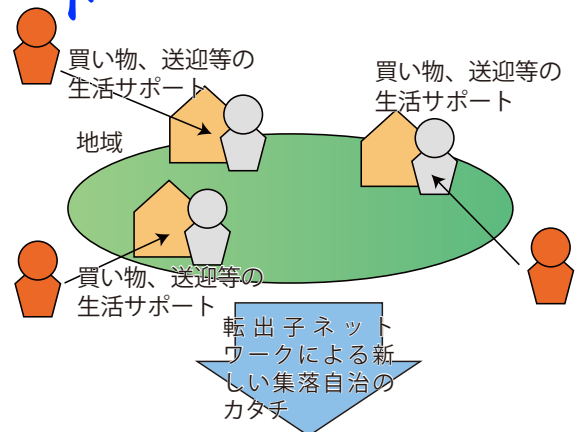
地域での生活者、外部のサポート主体、それぞれの主体性をどう高めるか？

20

## 転出子による地域サポート

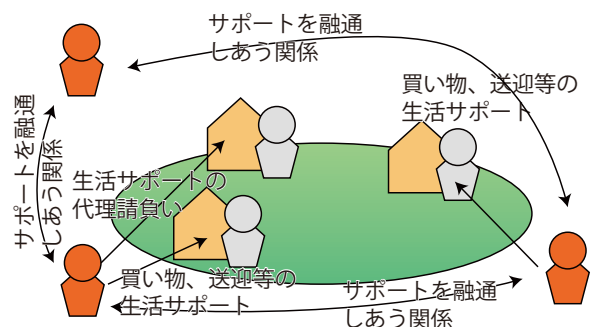
これまでの各家での家族間サポートの“ついで”に周辺家屋も含めた「集落支援」の可能性の検討

- 見守り
- 買い物
- 水源管理



都合が悪く、実家のサポートに行けない時のサポートの融通可能性

- 「お互い様」による相互支援
- 相互支援後のお礼のあり方



## 転出子による地域サポート

これまでの各家での家族間サポートの“ついで”に周辺家屋も含めた「集落支援」の可能性の検討

- 見守り
- 買い物
- 水源管理

都合が悪く、実家のサポートに行けない時のサポートの融通可能性

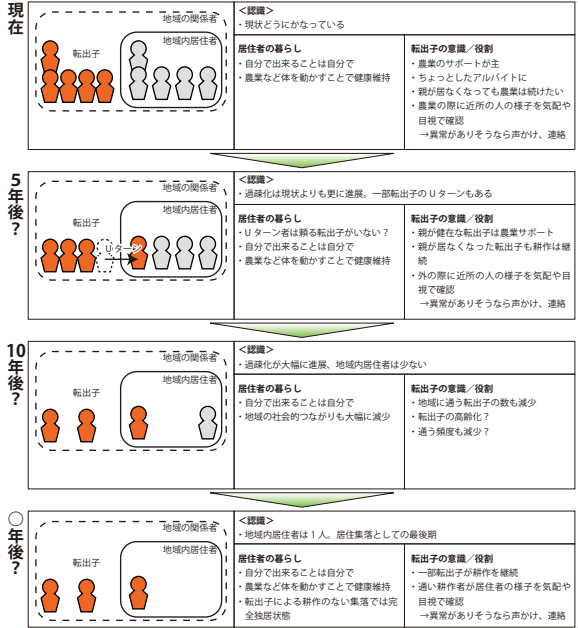
- 「お互い様」による相互支援
- 相互支援後のお礼のあり方

# 人口減少下での地域再生について

## 川奥地域における今後の集落居住上の論点

### 地域自治に必要な作業

- ・耕作 : 農業なくしてこの地域は存在しない
- ・水源管理 : 地域での暮らしには水源の維持管理が不可欠
- ・林地管理 : 林地の管理をする必要がある?
- ・道路管理 : 道路の維持管理 (ちょっとした補修/嵐の後/降雪時)



### 終末段階での論点

- ・安否確認 : 何らかの継続的な安否確認の方法を検討する必要がある→無意識的に可能な安否確認?
- ・水源管理 : ライフラインの確保をどの様にするか
- ・居住状況の共有 : 誰がどこにどのような状態で居住しているかの把握?

### 何らかの検討をする必要がある項目

#### 安否確認

- ・現状では、なんとなくがなっているが誰に課題認識がしにくい
- ・将来的な課題は理解できるが、現状どうにもならない
- ・不便に関しては、皆受け入れており、特に課題認識はない
- ・何もしないやり方は好まない
- ・「地域に暮らす高齢者は「他人に迷惑を掛けたくない」と思っており、自分の親戚以外のサポートを受けすることに抵抗がある
- ・信じている高齢者に精神的な不安をかけるような方を検討する必要
- ・○○のついでに安否確認
- ・既存のサービスへの付加
- ・郵便、新聞など
- ・IT技術を利用する方法
- ポットなどの家電使用通知など
- ・農作業ついでで周辺の家を回るにしても、谷が遠うため負担となる
- ・何らかのインセンティブが必要?
- ・農閑期
- ・転出者があまり地域に入りにくい時期の対応はどうするか?

#### 水源管理/災害時の緊急対応

- 洪水時の対応策は要検討**
  - ・敷地内に二次災害管理の設置?
  - ・近隣に居る若手への対応依頼?
  - 対価/お礼、お互いが受け入れられるサービス交換の手法を検討する必要がある
  - ・複数の水源を確保できていない世帯への複数水源確保の検討?
- 災害時の緊急対応**
  - ・今シーズンの積雪対応を確認する必要?
  - ・台風後の倒木対応を個人のボランティアにしないしくみ?
  - 共済相合的互助の仕組みづくり?

#### 情報共有の仕組みづくり

- 誰がどこにいるかの共有**
  - ・結婚、助け合うにしても誰がどこに居て、誰が対応可能なのかがわからなければ難しい
  - ・誰が地域(川奥)にいて、対応可能なかどうかをそれぞれが共有できる仕組み?
  - LINEなどスマートフォンアプリの活用?
- どこにどの様な人が住んでいるかの共有**
  - 応、川奥全体で共有して行く必要があるのでは?
  - ・個人情報関係で行政は関与しにくい

#### 互助組織化?

- 負担分散の必要**
  - ・一部のみに負担が行かないようにする必要
  - ・何らかのサポートを行った人に対価が供給される仕組み
  - ・会費制? NPO化?
  - ・世帯毎に加入?
  - サポートする側/される側が加入し、それぞれが会費を納めてプールし、サポートを行った人がそこから対価を受け取る?
  - 消防の世帯負担金のようかな?

持続的に居住者を転出子を始めとした関係者がフォロー出来る体制づくり

徳島大学 田口太郎 / taguchi@tokushima-u.ac.jp



# 地域が主体的に外部人材の可能性や受け入れ計画を立案するために 地域の状況分析からの地域づくり

地域状況の“見える化”による地域主体の課題対応

# なぜ「見える化」が必要か？

## 地域づくりは「地域全員」の取り組み

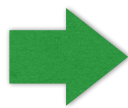
- ・一部のリーダーのみの活動となりがち
- ・一部リーダーの取り組みには持続性や普及に課題がある

## なぜ、地域の人達は参加しないのか？

- ・いまいち「ピンとこない」地域の将来
- ・「不安」はあるが、具体的にイメージできない

## 具体的な活動イメージが見えない

- ・問題に対して、何をしたら良いのか、分からない



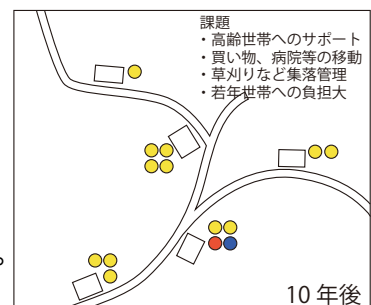
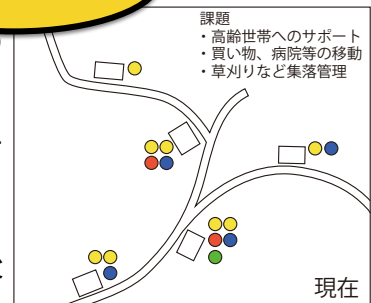
地域の遠からぬ将来をより具体的にイメージすることで、自分たちの地域の将来の実感を得る仕掛け作りが必要

# 集落点検W.S. 地域の現状を理解する

## WSの目的：

- ◎ 地域の現在、未来を“見える化”する。高齢化の進む神野地区の現状を地図上にプロットし、底から想定される課題を具体的にイメージする。
- ◎ 現在と10年後の状況を比較することで、今後厳しくなる集落状況を理解し、「何が出来るか？」を検討する際の基礎情報とする。
  1. 各地区で各家にどのような人がいるかを地図上にプロット
  2. 現在の課題を列挙する
  3. 同様に10年が経過したことを想定してプロットする

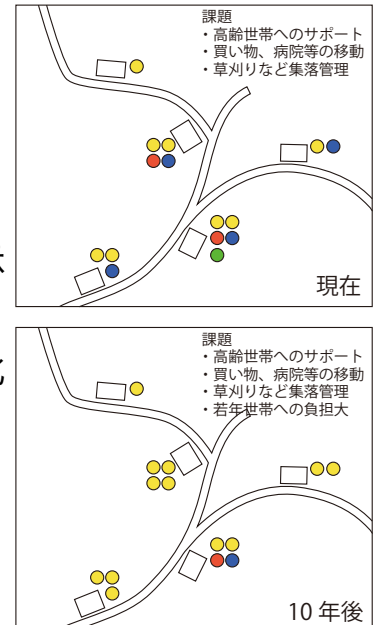
わかりやすく



# 集落点検W.S.

## WSのポイント

- 地域の高齢者を75歳以上と規定することで、現実的な高齢者をイメージできる
- シールで貼ることで主体的に作業することとなり、結果を受け止めやすい
- 集落単位でシールで表現するため、行政が示しがちな統計情報よりも理解しやすい
- 色で状況が表されるため、視覚的に状況変化を理解できる



# 対策のブレインストーミング

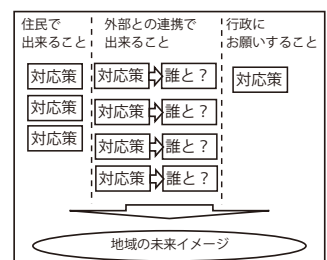
## 何をすべきかを考える

### WSの目的：

- 10年後の課題に対して、この10年の間でやるべきこと、しておくべきことを整理する。
- すべてやる、という前提で準備すると難しいため、とにかく沢山アイデアを出した上で、次回以降で優先順位を決め、具体的な行動方を検討する。



1. 前回W.S.の成果を振り返る
2. 現在の課題、10年後の課題に対してやるべきこと
3. 課題へ対応するために連携が必要な主体を考える
4. この10年の新しい取り組みで描ける未来のイメージを言葉にする



# 優先順位の決定と具体化

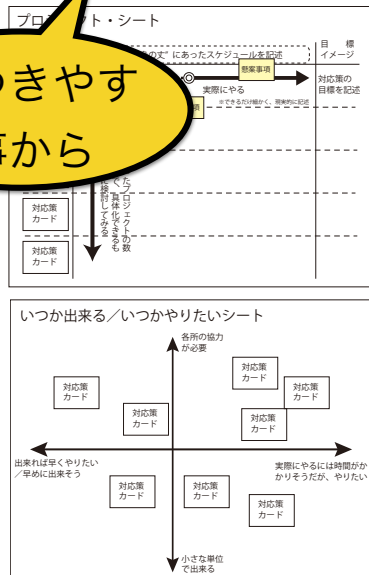
## 何からするかを考える

### WSの目的：

- WS02で出された対応策について、それぞれの優先順位を決め、優先順位の高いものから具体的にどのように進めていくか、も考慮する
- 優先順位の高いものについては、捨てるのではなく、いつかできる／いつかやりたいリストとして記録

1. 前回W.S.の成果を振り返る
2. 対応策の優先順位の検討
3. プロジェクト・シートの記述

とっつきやすい事から



# WSを通じて

### 住民の間で課題の共有

- 集落点検WSを通じて、地域課題を現実的に検討できた
- 地域住民の中で「可能なこと」の整理が出来た
  - 地域の住民にとっての居場所となる「拠点機能」の必要
  - 今後、運転できない住民の増加に伴う、地域内物販機能の必要
  - 地域外へ出かける機会を設定した上での送迎機能の必要
- 行政が進めようとしてきた「移住」に関しては、積極的でないことが確認できた



住民で出来ることを具体化を目指したカフェの設立に向けて2017年度具体的検討開始

徳島県版地方創生特区に選定！

# “その気にさせる”ポイント

## 心折らない程度の危機喚起

- いかに地域の方々に「自分ごと」として考えてもらえるか？

## ワークショップの位置づけの明確化

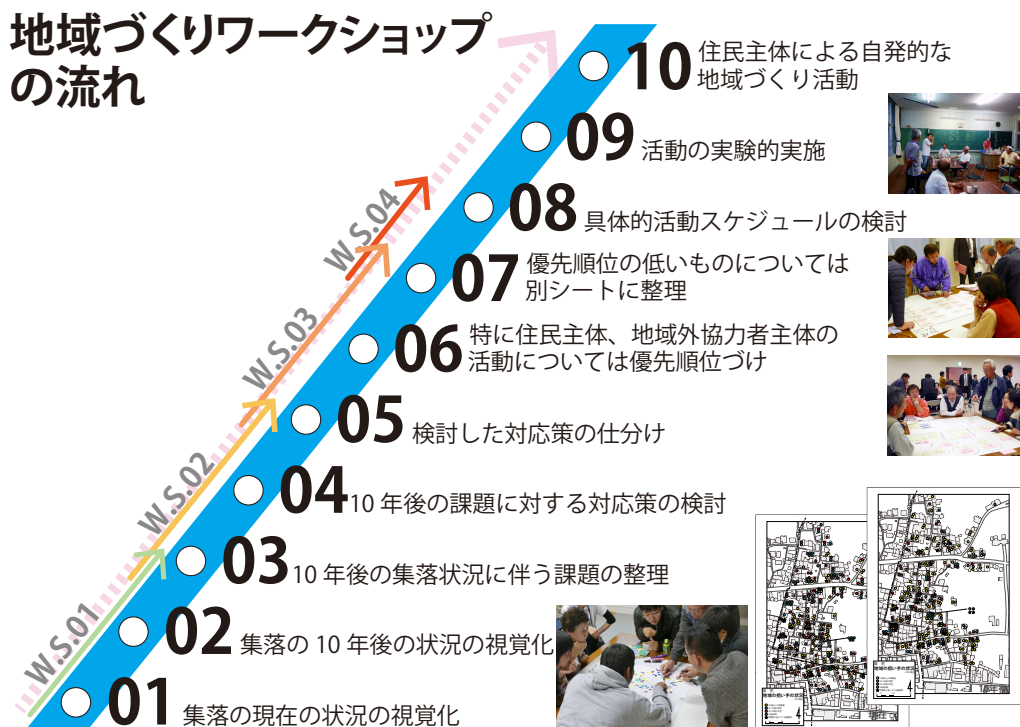
- 各回の検討内容の位置づけをわかりやすく

## 忘れないうちに

- まとめは大変でも地域の方々の記憶が新しいうちに次なる検討会の開催

# W.S.スケジュールの視覚化

## 地域づくりワークショップの流れ





# 連続W.S.による検討

毎月1回、全3回の連続ワークショップ+住民発表会を予定

